

緑陰

「緑陰」題字
本庄第一高等学校 本元彩乃

第28号

令和7年6月30日発行

一般社団法人埼玉県私学協会
〒330-0063
埼玉県さいたま市浦和区
高砂4丁目13番20
電話 048-863-2110
HP
www.saitamashigaku.com

一身にして多生を経る時代に想うこと

秋草学園高等学校 校長 関口 恭裕

福沢諭吉の『文明論の概略』に「一身あたまかにして二生を経るが如く、一人いちにんにして両身あるが如し」という一節があります。江戸から明治への転換期を生きることについて、まるで「一生のうち

に全く違う人生を体験することは、まるで一人の人間が二つの体を持つようなものだ」と著しています。近世の封建社会と近代の産業社会の両方を生きた福沢は、二つの人生を経験したに等しいと感じたのでしょう。

さて、今日の日本はかつてないスピードで技術革新が進み、情報化や国内外のグローバル化が進んでいます。今を生きる生徒たちは、まさに「一身にして二生を経る」どころか「一身にして多生を経る」ことになります。

令和6年12月25日に文部科学大臣から「初等中等教育における教育課程の

基準等の在り方について」という諮問が中央教育審議会に行われています。

この諮問では、子供たちは「激しい変化が止まることのない時代を生きる存在」、いわばマルチステージを生きていく存在であるとされています。この諮問は、日本の小中学校、高等学校等で実施される教育課程の基準となる学習指導要領改訂の方向性に関わるものですが、生徒を生涯にわたって主体的に学び続け、問題を発見・解決できる「持続可能な社会の創り手」に育てることを求めている印象を受けました。

また、この諮問には日本の現状についての添付資料がたくさんあります。特に少子化については、19歳以下人口（推計値）が、2025年の1907万4千人から2050年には1499万2千人へと400万人も

減ってしまい、OECDの予測では2060年には日本の生産年齢人口が51.1%にまで減少しOECD加盟国中最下位になるとしています。さらに、世界の不確実性指数が高まること、世界競争力ランキングにおける日本の順位が大きく低下し続けていること（1989年～1992年は第1位、2023年は35位）、世界のGDPに占める日本の比率も減少していること（2000年は8.3%、2060年は2.7%の予想）等も示されています。

国内では、右肩上がりの経済状況と企業の成長を前提とした終身雇用・年功序列制度・新卒一括採用などの日本特有の雇用慣行は、近年の経済の低迷やITの進化により働き方が変化したことにより崩れつつあり、ジョブ型雇用や中途採用の増加により労働市場の流動性が高まり、人生100年時代におけるマルチステージの人生モデルへの転換が進みつつあること等も述べられています。

その他にもたいへん気になる資料として「子供の幸福度（精神的幸福度、身体的健康、学力・社会的スキル）」の国際比較があります。出典は、ユニセフ・イノチェンティ研究所「レポートカード16―子どもたちに影響する世界・先進国の子どもたちの幸福度を形作るものは何か」となっていますが、先進

38カ国中日本は第20位です。項目別では、精神的幸福度（生活満足度が高い15歳の割合と15～19歳の自殺率）では日本は第20位ですが、身体的健康（5～14歳の死亡率と5～19歳の過体重／肥満の割合）では第1位、学力・社会的スキル（数学及び読解力で基礎的習熟度に達している15歳の割合及び社会的スキルを身に付けている15歳の割合）は第27位になっています。ちなみに、総合第1位はオランダです。デジタル競争力（人材、デジタル・技術スキルのスコア）の国際比較では、日本は44の国と地域の中で第32位になっています。

このように未来に生きる日本の子供たちを取り巻く社会はたいへん厳しい状況ですが、何時の時代も教育の究極の目的は生徒一人ひとりの幸福の実現にあると思います。この諮問を読み、私たち私学の教育者は、建学の精神に基づき、変化が激しいこれからの時代の生徒に求められる資質・能力を伸ばさせ、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来に渡る幸福、さらには一人ひとりの生徒だけでなく、生徒を取り巻く地域・社会が幸せや豊かさを感じられる、まさにウェルビーイングを実現する教育を行うことがこれまでに以上に強く求められていると感じました。

教員生活五十年に思う

学校法人山村学園 理事長 平野 正美

太田牛一の『信長公記』によれば、織田信長は幸若舞の『敦盛』を舞ってから桶狭間に出陣したとあります。「人間五十年 下天の内を比ぶれば 夢幻のごとくなり」の一節は、稀代の武将の死生観に合致したものと思います。

一方凡庸に生きてきた私は、大学入学後五十年が経過し『古稀』を間近に迎えるに至りました。半世紀ぶりに仲間が集うと、不思議と学生時代に戻ったような感覚を覚えます。学友とは、本当にありがたい存在です。

大企業の社長や大学の学長など社会的に成功した者もいれば、地道に教員や公務員を勤め上げてきた者もいる。大学卒業後それぞれの人生を歩んできた苦楽が眉間のしわや容貌の変化に現れていても、若かりし頃の面影は残っているものです。

同級生からは、「平野が高校教師か」と声をかけられます。先生という職業のイメージに対して、学生時代の私に

ギャップを感じるからでしょう。実際、マスコミを専攻し、卒業後は関連企業にも就職しました。

しかし、理想と現実との乖離を感じてすぐに退職し、中学校の代用教員になりました。戦後、「でもしか先生」という言葉が巷間流行りましたが、正に私は「でもしか」であったわけです。教員は腰掛のつもりで、民間企業への再就職を目指していたのです。

当時は、TVドラマ「3年B組金八先生」にも描かれていた校内暴力が激しい時代で、ツッパリたちが大学出たての青二才に突っかかってくる。それを、体を張って制する。彼らは、ルソーが『エミール』で「熱病にかかったライオン」と表現した思春期の若者たちそのものでした。

それでも、管理教育が好きではなかった私に共感するところがあつたのか、多くの生徒が懐いてくれて授業やクラス経営は順調でした。部活動では

男子軟式テニス部を指導したところ、数十人の部員が皆私のフォームに似てしまったことには苦笑いです。生徒たちが、年の離れた可愛い弟や妹に思えたものです。一時凌ぎのつもりで教員が楽しくなつて、のめり込んで今に至っています。

高校教員を目指して一年間で中学校を離れた私に、20年ほど経つたある日突然の連絡がありました。かつての教え子が、教育関連の雑誌に載つた私のインタビュー記事を検索して、職場に電話をかけてくれたのでした。後日、教え子たちが百名ほど集まつて、同窓会を開いてくれました。あの頃のツッパリたちも、皆いいおやじになつて顔を揃えてくれ、大いに昔話に花が咲いたものです。教員生活もいいものだ、と実感したことを思い出します。

さて、半世紀近い教員生活の間に世の中は大きく変わりましたが、かつて望んだ平和で平等で豊かな社会が実現したでしょうか。

『昆虫記』で有名なファールブルは、「人間は進歩に進歩を重ねていくうちに、自分のつくつた文明といわれるものの洪水のために、いつかおぼれ死にさせられる日が来る」と警鐘を鳴らしました。残念ながら、その通りに人類は科学技術を制御できずに東京電力福

島第一原発の事故や地球温暖化による異常気象など被害は深刻です。

一方、大国による覇権主義の横行や民族対立は解決の糸口が見えず、人類が長い歴史の中で築いてきた世界平和や民主主義がいつも簡単に崩されてしまふ様を、私たちはただ傍観しているのです。しかも、日本は少子高齢化と人口減少にあえぎ、技術立国や貿易大国という言葉はすでに死語となりました。

激変する社会への対応が、一番遅れているのが日本ではないでしょうか。特に、教育については、先進国の中でも周回遅れの感が拭えません。教育のIT化が進みPCや電子黒板は整備されましたが、従来と変わらない知識偏重の講義型授業では十分な効果は期待できません。

これまでは、従順で真面目な、いわゆる良い子を育てることが教育の目標でしたが、これからは、創造性や批判的精神にあふれ、自分の意見を持ち、多様な価値観を認め他者と協働できる若者を育成することが求められるでしょう。

もう一度教壇に戻れるならば、あのツッパリたちも含めて生徒たちの個性を伸ばす21世紀型の授業を実践したいものです。

日本における私学教育のあけぼの

栄北高等学校 校長 瀧谷千秋

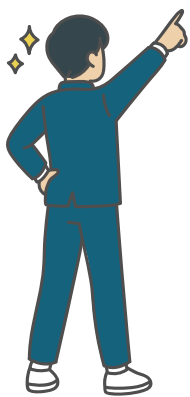
日本において教育制度というものが形作られたのはいつのことかと考えてみた時、7世紀の半ば、唐の進んだ制度を学び取り、わが国の発展に役立つことを目的に派遣された遣唐使が関係していることは確かであろう。遣唐使がもたらした唐の律令制度に関する情報を得た朝廷は、蘇我氏ら一部の有力豪族たちが動かしてきた国家の体制を変革し、天皇を中心とする中央集権国家の建設を目指して、645年の乙巳の変にはじまる、いわゆる大化の改新をスタートさせたのである。しかし、その後、約半世紀の間は朝廷内において権力争いが展開され、日本版の律令制度が確立されて、中央集権国家としての歩みを始めたのは、701年の大宝律令制定からであったと考えて良い。

関として中央には大学が、地方には国学が設けられた。大学には儒教の『論語』などを学ぶ明経道、律令・格式（格式は律令の修正・追加法令、式は施行細則）などの法律を学ぶ明法道、算術を学ぶ算道など6道にわたる学科が設置されていた。また、その他に医療や調剤などを担当し、医療従事者養成機関としての役割もあつた典藥寮、占い・天文・暦などを担当し、陰陽師の養成機関でもあつた陰陽寮など専門的な技術を身に付けさせるための機関も存在していた。

当時の学生たちの中で、有力貴族の子弟たちは、一族が設けた大学別曹という施設を利用することが可能であった。和氣氏の弘文院、藤原氏の勸学院、在原氏の奨学院などが特に有名である。しかしながら、有力貴族たちから大学別曹を設置するようになってからは、大学の存在自体が揺らぎ始めたといえる。大学別曹では安定した学習環境が維持され、そうではない氏族出身者の者との間の格差が生まれるなどの問題が生じたのであつた。9世紀の終わりには菅原道真の建議によつて遣唐使廃止が決定され、唐の制度に対する関心の低下など様々な要因も重なつて大学の存在意義も次第に低下していったのだ。

当時の大学は、現代でいえば国立大学に相当すると考えて良いと思う。では、私学に該当する教育機関は古代社会に存在したのであるか。806年、一人の僧侶が唐から帰国した。遡ること2年前に遣唐使の長期留学僧として海を渡つた空海であつた。空海は真言宗を日本に伝え、高野山金剛峯寺を建立した。そして、空海は828年に「綜芸智院」を設置した。現存していないが、綜芸智院蹟の石碑は京都駅から直線距離で500メートルほどの場所にある。ただ、実際はそこより南東へ直線距離で300メートルほどのところにあつたとされている。綜芸智院は身分や貧富に関係なく、一般庶民も学べる教育機関であり、庶民たちは儒教・仏教・学芸などを総合的に学ぶことができたと言われている。貴族の子弟たちに対する教育の確保でさえ難しい時代に庶民にも門戸を開いたのだ。今で言う、いわゆる「私学」なんて上手くいかないだらうというの

が、世間一般の見方だつたという。しかし、空海の熱意に応え、土地や建物を寄贈する者もおり、日本初の私学が開校に至つたのであつた。空海は自らが目指す理想的な教育には「良い環境」「総合的な教育」「優秀な教師」が必要であるとしている。また、それと同時に、学ぼうとする人々には衣食を支給すべきという考えがあり、その費用は彼の寄付によつて賄われたという。つまり、せつかく庶民に学びの場を提供しても、費用が多くなつてしまえば、その機会を失つてしまう者も多い。だから、今で言う学費無償を掲げていたのであつた。今から1,000年以上もの昔、空海は私学教育の理想をすでに持っていたと言えるのである。しかし、残念ながらこの空海の建学の精神がどこまで実現されたかの歴史にほとんど記録されていない。そして、空海の死後10年ほどが過ぎた845年に、約20年弱でその歴史の幕を閉じたのだという。



生徒たちを取り巻く環境

武蔵越生高等学校 校長 一川 智 宏

近年、私たちの社会は急速に変化し、それに伴い、生徒が直面する危険も多様化しています。かつては家庭や学校が安全な空間とされてきましたが、現代においては必ずしもそうとは言えません。情報化社会の進展、SNSの普及、精神的ストレスの増加、そして家庭環境の変化など、さまざまな要因が生徒たちの安全を脅かしています。私たち教育者は、この現実を直視し、生徒を守るための具体的な対応を講じる必要があります。

1. SNSとインターネットの危険

スマートフォンの普及により、生徒はインターネットを通じて瞬時に世界とつながることができるようになりました。しかし、その便利さの裏には多くの危険が潜んでいます。匿名性を利用した誹謗中傷、いじめ、個人情報漏洩、不適切なコンテンツへのアクセスなど、インターネット上には多くのリスクが存在します。特に、SNSを通じたトラブルは年々増加しており、

時には精神的に追い詰められ、不登校や自傷行為に至るケースも報告されています。また、SNSを通じた出会いによって、被害される事件や援助交際、児童ポルノの被害者になってしまいうケースや、インターネット上の広告から、オンラインカジノなどの違法サイトにアクセスしてしまうケースも考えられます。流行のアプリの利用によって、返信しなければいけないという圧力を感じることもあるようです。

私たちは、生徒に適切なリテラシー教育を行い、インターネットとの適切な付き合い方を指導する必要があります。家庭でも、フィルタリングやスクリーンタイムなどを有効活用することが必要不可欠となります。

2. 精神的ストレスと心の健康

現代の生徒は、学業成績や進路、友人関係、家庭環境など、さまざまなストレスを抱えています。特に私立学校においては、保護者の期待や学業のプレッシャーが大きく、それが生徒の心

に負担をかけることも少なくありません。適切なストレス管理ができないまま過度なプレッシャーにさらされると、精神的な不調を引き起こし、うつ症状や自己否定感を強める原因となります。

私たちは、こうした問題に対して積極的に関与しなければなりません。学校としては、カウンセリング体制の充実やメンタルヘルス教育の強化が必要です。また、生徒が自分の気持ちを安心して話せるような環境をつくり、教員やカウンセラーが生徒一人ひとりと向き合うことが重要です。

3. 家庭環境と生徒の安全

家庭は本来、生徒にとって最も安心できる場所であるべきですが、近年は家庭の事情による生徒の不安定さが問題となつていきます。共働き家庭の増加、経済的な問題、離婚や家庭内不和など、家庭環境の変化が生徒の精神的な安定を脅かす要因となつていきます。場合によっては、家庭内での虐待やネグレクトが生徒の心と体に深刻な影響を及ぼすこともあります。

学校は、こうした生徒たちを見逃さないことが求められます。教員が日常の中で生徒の異変に気づき、適切な支援を提供できるように仕組みを整えることが大切です。また、保護者との連

携を強化し、学校と家庭が一体となつて生徒の健やかな成長を支えていくことが重要です。

私学としての使命

近年、全国的に高校の転学者が増えています。止むを得ない理由での転学は仕方ないのかもしれませんが、何か悩み事があったときに教員としては解決の糸口を見つけないものです。折角関わった生徒の成長を見届けることができず、残念ではありません。

私たち私立学校は、公立学校とは異なり、独自の教育理念のもと、生徒一人ひとりに寄り添った教育を実践できる強みを持っています。単に学力を上させるだけでなく、生徒の心身の安全と成長を支える環境を提供し続け、生徒と信頼のある関係を築いていくことが、危険にさらされた生徒たちを守ることに繋がります。

